

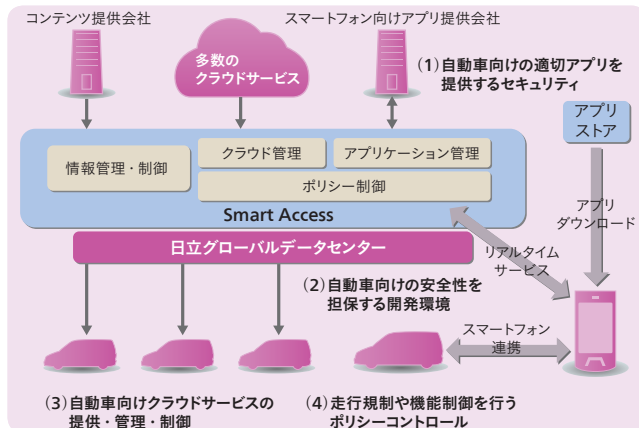
車内空間へのリアルタイムな情報提供を可能にする 自動車向けクラウド型テレマティクスサービス

自動車に搭載された通信端末から、ネットワーク経由で幅広い情報を利用できる「テレマティクス」が本格的な普及段階に入った。

クラリオン株式会社は、スマートフォンとも連携したクラウド型テレマティクスサービスのSmart Accessを構築し、北米と日本でサービス提供を開始した。

その基盤を担うのは、日立オートモティブシステムズ株式会社が稼働させている日立グローバルデータセンターである。

両社のキーパーソンに、日立グループが推進するテレマティクス戦略と、その未来像を聞いた。



クラウド型テレマティクスサービスSmart Accessの特長

クラウドを基盤にスマートフォンとも連携するSmart Access

昨今のクラウドコンピューティングの進展やスマートフォンの普及は、日本のテレマティクスにも大きな影響をもたらしています。地図や交通情報、ナビゲーション、音楽など、これまで車載器に搭載されていた機能の多くは、自動車の外に存在するようになりました。そういった時代に、世界中のユーザーが求める機能を自動車の中でもシームレスかつ安全に提供する方法を考え、導き出した答えがクラウド型テレマティクスサービスSmart Accessです。

Smart Accessは世界中のクラウドサービスやスマートフォンと連携しながら、リアルタイムな交通情報や地図情報、施設情報などを提供します。また、インターネットラジオやソーシャルネットワークを楽しむこともできます。運転中の安全性を第一に考えているため、それらの文字情報を音声変換して読み上げることも可能です。つまり、Smart Accessによって、車内空間が外部と隔離された世界ではなくなるわけです。

日立グループの総力を挙げたテレマティクスソリューション

常に鮮度の高い情報を提供するため、Smart Accessはクラウド型サービスを基本としていますが、その基盤となっているのは日立グローバルデータセンターです。

日立グループは、2000年代前半から、ユーザーが普段の生活で利用している携帯電話や音楽プレイヤーと車載器

のシームレスな連携、インターネット情報の活用、その基盤となるSaaS (Software as a Service) の構築など、次期テレマティクスに向けた技術開発の検討を開始していました。そしてそれを具現化して商用提供したのが、日産自動車株式会社の「日産リーフ」向けのテレマティクスサービスです。北米・欧州・日本で2010年から開始された同サービスの運用を日立グローバルデータセンターがトータルに支援したことで、グローバルなテレマティクスサービスに不可欠な通信プロトコルやアプリケーション制御、クラウドサービスとの接続性などにおいて先行的な経験値とノウハウを蓄積してきました。その成果をベースに、より幅広いユーザーに向けて開発したのがSmart Accessです。

マルチモーダルなサービス領域へ拡大

Smart Accessはまず、テレマティクスのレイヤーの一つである「エンタテインメント」、つまりエンタテインメント関連の情報提供をメインにスタートしました。今後はもう一つの重要なレイヤーである「ビークルセントリック」を強化し、自動車の部品に取り付けたセンサーや車載カメラからの情報を収集・分析した安全・安心で快適な走行を担保するサービスにも力を注いでいきます。そして将来的にはこれらのノウハウとクラウド基盤を生かし、人が移動する際に用いるあらゆる交通手段とクラウドサービスを連携させ、マルチモーダルなサービス領域にも拡大させていきたいと考えています。



日立オートモティブシステムズ株式会社 CIS事業部 システムソリューション本部 開発企画部の柏山正守 部長 (左)、クラリオン株式会社 マーケティング戦略本部 システム企画部の宮澤浩久 部長 (右)